

イラク・クルディスタン戦後復興に沸くもう一つのイラク (フォト・エッセイ)

著者	岸田 圭司
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	134
ページ	44-47
発行年	2006-11
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://doi.org/10.20561/00047297



■ フォト・エッセイ ■

イラク・クルディスタン —戦後復興に沸くもう一つのイラク

写真・文
岸田 圭司
Keiji Kishida

アルビル全景。郊外に新築のマンション群が見える

自動車爆弾、自爆攻撃、誘拐、暗殺。イラクの首都バグダッドとその周辺の治安悪化に歯止めがかからない状況が、連日のように報道されている。今年八月には、米中央軍の司令官もバグダッドの状況に言及した上で、「宗派間抗争を止められなければ、イラクは内戦に向かう可能性がある」と上院軍事委員会の公聴会で証言した。イラク戦争から三年以上が過ぎたが、安定には、ほど遠い状況が続いている。

一方、そんな一触即発の危機的状況と対極的で、戦後復興の最中にあるのは、北部のクルド人自治区である。

私が訪ねた昨年の一二月には、自治区の二つの都市（アルビルとスレイマニア）でショッピングセンター、マンション、ホテルなどの大型建設が次々に行われており、地元経済は活況を呈していた。テナントの使用権利が建物の完成前から売買され、その金額は右肩上がりだという。知人のビジネスマンは、「自治区の首都アルビルは第二のドバイ（中東随一の商業都市）になると、将来に期待を寄せる。投資を行なっているのはその多くが外国資本ではなく、地元の人たちだ。そのあまりの過熱ぶりは、バブルではないかと心配させるほどの勢いであった。

さらに、昨年六月アルビルに、そして、七月にはスレイマニアに空の玄関口となる国際空港がオープンした。路線は次々と増え、昨年一〇月にはドバイやアンマンなど



空港開港に伴い、旅行代理店もオープンした



アルビルのショッピングモール建設現場



ヨーロッパに向かうクルド人たち。アルビル空港

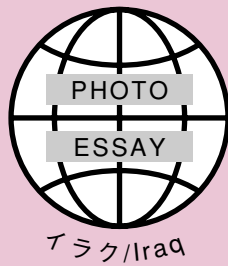
近隣国のほか、アムステルダム行きなど欧州便も登場した。バグダッドを経由しない直行便もある。利用者の多くは、外国に亡命したクルド人である。

バグダッドとは、車でわずか約五時間の距離。治安悪化のイメージが強いイラクとかけ離れたもう一つのイラクがここにある。ここでは、新しい世代が活躍している。

一九九一年湾岸戦争後の混乱によって、北部三県とその周辺は旧フセイン政権の権限が及ばない地域となった。それ以前のクルド人青年は大学を卒業する時、三つの大きな選択を迫られた。徴兵制に従い、イラク軍の兵士となるか、「山に行く」という隠語で語られるクルド武装勢力に参加するか、もしくはその両方に属さず、逃亡生活を続けるか、である。八年続いたイラン・イラク戦争、そして続くクウェート侵攻。フセイン政権時代、イラク軍に入隊することは、実戦に投入されることを意味した。

イラク中央政府の権限が及ばなくなった現在の北部では、徴兵に心しないことは「当然」の権利となり、また、クルド自治政府も徴兵制を採用しておらず、青年が強制的に戦争に駆り立てられることはなくなった。彼らは、自分の将来を長期的に考えることが可能となった新しい世代である。

昨年、スレイマニアでインターネットの個人用ADSLプロバイダーサービスが始まった。事業を立ち上げたアラム・バルサンジさん（二三）は、フセイン政権時代に



「ゴランネット」のスタッフたち



社名の「ゴラン」はクルド語で「歌」を意味する



CEO室に座るアラム・バルザンジさん

閉鎖され、一九九二年に再開したスレイマニア大学でコンピュータ科学を学んだ。しかし、「教わったのは二〇年前の技術。インターネットを通じてADSLのシステムを独学で学んだ」という。

外国企業に技術協力を仰ぐなど、事業立ち上げにかかった総費用は約一億円。その大半は、亡き父の親友のクルド人ビジネスマンに出資してもらった。事業開始前には、技術スタッフを伴って海外に研修に出かけた。手探りで始めたこの事業は順調に成長し、現在、スタッフは四〇人、交代制で二四時間サービスを提供している。女性スタッフも活躍し、契約も約三〇〇〇世帯となった。現在、サービス・エリアを他の都市へ広げるための許可取得に奔走している。

「プロバイダー事業はそれほど儲かるビジネスではない。いつまで続けるか分からないが、将来性のあるコンピュータ関連の仕事は続けていきたい」とアラムさんは冷静に自らの事業を語る。

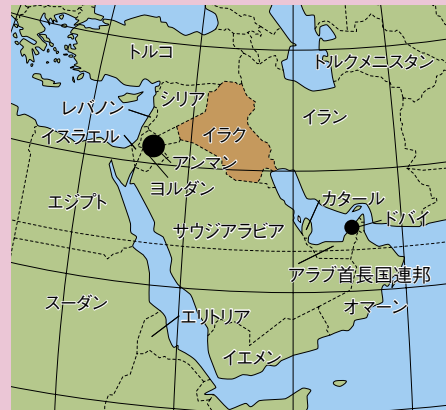
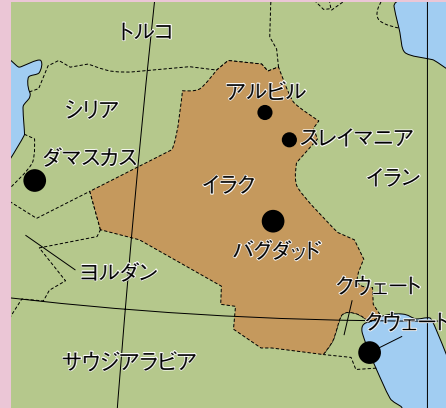
また、アラムさんと同レスレイマニア大学の獣医学部を卒業したアリ・アブドッラさん（二七）は、イラク・クルド自治政府農業省のセイ・サディック駐在所の所長を務めている。大学卒業後、クルド自治政府農業省所管の獣医としてFAO（国連食糧農業機関）との連携プロジェクトなどをこなしてきた。現場での経験が増えるにつれ、もう少し勉強したいと思った。村人が自分を頼りにしていることを強く感じたからだ。



アリさん（中央）とセイ・サディック駐在所のスタッフたち



予防接種のため村を訪問したアリさん



白衣を着て薬品をチェックするアリさん

それで、バグダッド大学農学部の大学院で学ぼうと二年前の夏、バグダッドを訪ねた。学部長は実務経験のあるアリさんの受け入れを歓迎したという。しかし、学部長室でさえ、ドアが無く、窓ガラスも割れたまま放置されているのを見て、勉強ができる状態ではないと思ひ、入学を諦めた。

アリさんの担当地域はセイ・サディックとその周辺にある五三村。ここでは、羊約七万頭、ヤギ約二万頭が飼育されており、さらに六つの養鶏場があるという。定期的な家畜に予防接種を行うため、二人の助手と運転手の四人のチームで村々を回る。イラク北部には、伝染力が強く世界でも恐れられている口蹄疫をはじめ、寄生虫、肺炎など数多くの病気がみられるようだ。家畜の伝染病が大発生すれば、肉を好んで食べるイラクの人々にとって、死活問題となる。その流行を未然に防ぐ獣医の責任は重い。

「最新の専門知識を学びたい。大学で教わらなかつた症例に出会うことはしばしば。獣医として恥ずかしい」というアリさんは海外で勉強するのが夢だ。

イラクを巡る状況は流動的である。クルド自治政府においても、その最終的な地位は確定しておらず、汚職や職権乱用に対する市民の不満の声が高まるなど多くの問題を抱えている。しかし、新しい世代は未来に希望を見出し、自らの道を歩んでいる。

(きしだ けいじ／東京外国語大学大学院博士前期課程)